



地域と生きる

おんが病院・おかがき病院だより

「人生には山あり 谷あり 奇遇あり」

杉町 圭蔵



2010年から遠賀中間医師会病院にお世話になり、15年が経ちました。この間、多くの方々にお世話になり、心から感謝しています。

今回「地域と生きる」の執筆依頼を受けましたので、この機会に、私的なことで恐縮ですが、「山あり 谷ありの86年の人生」をふり返ってみたいと思っています。

私の人生には、2つのターニングポイントがありました。

最初は、中学3年時の、自分ではどうしてもコントロールできない反抗期です。特別な理由もなく父親に対する強烈な反抗です。同じ家に住んでいても父親とは顔を合わせることを避け、勿論、会話は全くありませんでした。自分自身の心の病で、自分で自分を追い詰めて、中学3年の3学期に、長崎県の諫早の家を無断で飛び出し、福岡にいた新婚の兄のところへ転がりこみました。

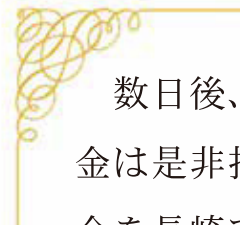
兄は、私が突然転がり込んだので、驚いていましたが、快く、私を受け入れてくれ、一緒に住まわせてもらいました。

高校には進学したいという私の希望も聞き入れてくれて、筑紫丘高に入学しました。担任だった樋口進先生の「医師になったらヒトを助けることができるよ!」という言葉は、将来の夢が描けずに迷っていた私に大きなインパクトを与えました。

九大合格を最も喜んでくれたのは、狭い家で3畳の部屋を使わせてくれた兄だったでしょう。

合格は嬉しかったのですが、私の心には、黒雲が立ち込めました。それは、入学金がないのです。困り果てて、九大の事務局に「入学金が払えない。」と相談に1人で行きました。事務局でも「そのような相談は初めて。」とのことで、即答は頂けず、数日後にもう一度相談に行くことになりました。





数日後、事務局の方は、「入学金を払わないと入学したことにならないので、入学金は是非払ってください。その後、授業料免除の手続きは出来る。」とのことで、入学金を長崎で薬局をやっていた叔父から借りて、無事、入学することができました。

早速、アルバイトを始めました。金久卓也先生の子供の誠君、実君兄弟の家庭教師をさせて頂きました。2人共に凄すぎて、私が教えることは何もなく、毎回、遊びの相手をしていました。2人とも東大に進学し、弟の実君は、東大教授になり、彼の名前がノーベル賞候補に挙げられていることを、最近、新聞で知りました。

卒業後のインターンは、秋田県の大館公立病院(月給8000円)で、為近義夫君と冬はスキー、夏は登山と楽しく過ごしました。

インターンが終わる頃、親友の朔元則君から電話を頂き、彼は第二外科に入局することを決めたと言います。私は、あまり深く考えることもなく、第二外科と一緒に入局しました。

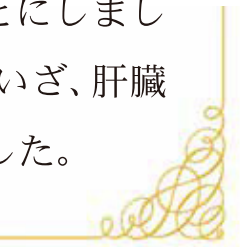
これが、私の第2のターニングポイントです。

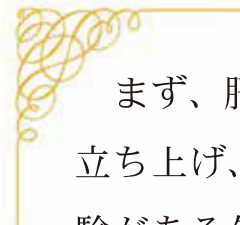
第二外科の医局員はすべて臓器別の研究グループに属していますが、私は、中村輝久講師が新たに作られた食道グループに入れて頂きました。

その後、助手、講師、アメリカ留学、助教授などを経て、1985年7月に九大第二外科の教授に選ばれました。九大第二外科の教授は、医局員から見るとヒマラヤの頂上みたいなところにあり、とても、自分の手が届くところにあるとは思っていませんでしたが、ある日、小児外科の池田恵一教授から電話を頂いて、私が教授に選ばれたことを知りました。

日頃から、家内は私が教授になることに反対していましたので、その日、家に帰ってどのように説明するのか悩んでいました。家に帰って、そのことには触れずに夕食をしていたら、家内が、「今日、何かあったでしょう？」と言います。知らん顔をしていると、同級生の久米一弘君から「おめでとう」という電話があったそうで、家内は全てのことを知っていました。私は、選ばれて、嬉しさ半分、やれるかなーという不安半分でした。

教授になったのは47歳でしたから、教授在任期間は16年あります。教授として、業績を後世に何か残したいと思い、私の専門外の肝臓移植に挑戦することにしました。肝臓移植は、1967年にスターツル教授がすでに成功されていました。いざ、肝臓移植の研究を始めると言っても何から手を付けたらいいのか暗中模索でした。





まず、肝臓癌の研究をやっていた竹中賢治君をチーフとした肝臓移植グループを立ち上げ、ラットやウサギを使った動物実験を始めると同時に、アメリカ留学の経験がある矢永勝彦君に再び、アメリカに留学していただき、肝臓移植の臨床を勉強していただきました。

長い間、肝臓移植症例には恵まれませんでした。移植の手術手技を使って体外肝切除術を1990年3月26日に行いました。これは、通常の肝切除術では、肝臓の切除が困難な症例に対して、一旦、肝臓を全部取り出し、体外で完全に癌を切除してから、きれいになった肝臓を元に戻すという世界で2例目、我が国では初めての手術です。

臨床で肝臓移植がいつ出来るのか、全く判らない中、大阪で脳死の方のご家族が、臓器を提供して下さるという連絡が1993年10月21日にありました。直ちに、矢永勝彦君と西崎隆君に大阪に臓器摘出に行ってもらいました。

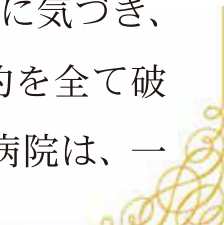
大阪では、警察が「脳死の段階で臓器を摘出すると殺人罪になると言っている。」ということで、心停止を待ち、肝臓を摘出し福岡に持ち帰り、10月22日に末期肝不全で入院されている方に移植しました。手術手技的には上手くいきましたが、合併症で1ヶ月後に亡くなりました。

1996年10月14日には九大小児外科からの紹介で小学1年生の胆道閉鎖の患者に父親から肝臓の提供を受けて、第一例目の生体肝移植を行いました。先日、彼とお会いする機会がありましたが、術後28年の現在もお元気で、2人の子供さんの父親になっていました。私が、九大を停年退職するまでに63例の肝臓移植を行いました。今日では九大では1000例の肝臓移植が行われています。

2002年4月に九州中央病院の院長に就任してみると、病院は、日教組系の労働組合が幅を利かせていました。

九州中央病院の敷地内には赤旗が立っており、病院の中に大きな労働組合の部屋があり、専従の労働組合員が2人居て、団体交渉やストを先導していました。赤字解消には組合対策が必須でした。

私は、病院の給与係りが給料から組合費を集め、それを労働組合に渡すことを禁じました。すると、組合員は、高い組合費を毎月払うのがバカバカしいことに気づき、組合員が急減しました。労働組合が衰退したところで、50年間の労働協約を全て破棄し、労働組合は消滅しました。これで病院には活気が出て、赤字続きの病院は、一



気に黒字となりました。

遠賀中間医師会の堤成基会長は、強いリーダーシップと熱い情熱で、経営を度外視して、50年間赤字の福岡県立遠賀病院を医師会で引き受け、急性期病院の「おんが病院」と慢性期の「おかがき病院」に分けて運営されることになりました。しかし、県立病院から医師会病院になっても経営状況は改善せず、病院の長期的な展望が全く見えないまま、借入金は毎年、毎年、増加し、銀行からは、もうこれ以上融資できないと言われてしまいました。

私は、堤会長から赤字病院の立て直しを嘆願され、2010年4月におんが病院、おかがき病院の統括院長を引き受けました。

幸いに、職員と医師会員の先生方のご協力を頂いて、1年で黒字となり、その後、経営は非常に安定しています。

これからの医療は、患者さんの超高齢化に伴って、患者さんに病院に来て頂くだけではなく、医療スタッフが患者さん宅に出向く在宅医療が必要です。おんが病院には在宅総合支援センター、おかがき病院には地域総合支援センターを併設し、訪問診療、訪問看護、検診にも力を入れています。



令和6年度 おかがき病院『院内学会』

を開催いたしました！

令和6年度 おかがき病院『院内学会』を開催いたしました。昨年に引き続き、座長を桑野センター長、司会進行を教育委員会 古野師長が務めました。まずは松坂看護部長が開会の挨拶を行い、緊張している発表者を鼓舞し、発表への期待の言葉を述べ、院内学会が始まりました。

～発表演題～

- 南病棟：回復期リハビリテーション病棟の患者の機能回復促進と社会的スキル向上の取り組み
- 北病棟：身体拘束廃止に向けた取り組み ～身体拘束ゼロを目指して～
- 西病棟：認知機能低下のある患者に対するレクリエーションの効果
- 外 来：医療材料のコスト意識調査からみえたもの
- 理学療法士：温熱療法下での低負荷筋力訓練による骨格筋の筋力増強に関する研究
- 作業療法士：情報共有 ～できるADLを、しているADLへ～

今年度は、5 部署・6 演題の発表が行われ、どの演題も興味深く学びの多い発表でした。



全ての発表が終了し、会場の緊張した空気も和やかになったところで、最後に末廣院長先生より講評と参加賞の授与が行われました。発表者の達成感と安堵した表情がみえました。

おかがき病院の今後の発展と成長を願い、今年の『院内学会』は無事に幕を閉じることができました。たくさんの方に参加していただき、有意義な院内学会となったのではないのでしょうか。また来年、多くの部署が参加し、よりよい『院内学会』となるよう教育委員会一同一丸となり努めてまいります。

教育委員会



ショートステイおかがきのご案内



ショートステイおかがきは 2016 年 6 月に開設し 8 年を迎えることができました。これもひとえに、地域の皆様の温かいご支援によるものと感謝しております。

ショートステイを運営する中で感じる事は自宅で介護をされるご家族の温かい気持ちです。

ご家族の方はご自身の生活、仕事を行いながら介護を行われ、ご利用者様の薬の管理や、排泄のケアなど、夜も眠れないこともあるかと思えます。また熱がでたり、転倒したりとアクシデントもあり、介護は毎日の生活の中で心が休まる時がありません。

ショートステイはそのような自宅で介護されているご家族が、ほんのひととき、ほっとされ、自分の時間を持つためのサービスだと思います。私達スタッフはご家族の代わりにはなれませんが、出来る限りご利用者様が家にいるときと同じような気持ちで過ごして頂けるよう、ご家族の気持ちとともにありたいと考えています。

ショートステイおかがきは病院の敷地内にあり、医療との連携が図りやすい環境にあります。お一人お一人の症状は違いますが、看護師、介護士、理学療法士、相談員がチームとなり、ご利用者様の状態に合わせて1日を快適に過ごしていただけるようにサービスを提供させていただいております。

具体的なサービスとしては血圧の測定や薬の管理などの健康管理から入浴、排せつなどの日常生活活動の支援、そして脳トレや起立訓練、レクリエーションなどの機能訓練やお楽しみいただける活動も行っています。

ショートステイを利用することで1日でも長く、ご自宅での生活をお過ごしいただければと思っておりますので、日々の介護での不安や分からないことがありましたらいつでもスタッフにご相談下さい。一緒に考え、悩みながらともに歩んでいきたいと考えています。

これからも地域の在宅生活を支えていけるよう日々研鑽をつんでいきますので今後ともよろしくお願いたします。



ご利用者様のレクリエーション作品



施設の見学や利用のご希望も随時受け付けておりますので

お気軽に連絡を下さい。 TEL : 093-281-5117 (直通電話)

ショートステイおかがき 士長 高崎弘嗣

発行日:令和7年1月吉日

発行:遠賀中間医師会おんが病院・おかがき病院